

二条吉五郎

天草市有明町楠甫に一基の流人墓がある。

墓の主は本名倉若吉五郎、通称二条吉又は二条吉五郎である。

この二条吉とはいかなる人物か。

流人は当時の法により犯罪者であり、その犯罪者である流人を受け入れる村にとっては大変迷惑なことであった。その迷惑な人物の墓を造るという事は、何か村にとって有益な人であったと考えられる。

では二条吉はどういう人物で村にとっていかなる益をもたらしたのだろうか。

だが時は幕末のことではあるが、きちんとした記録は残されていないようだ。ただ断片的には残されているようである。

吉五郎は、文政十一年（1828）に天草に流され、楠甫村の預かりとなった。墓碑によると、生まれは関東の武蔵国の生まれである。十九歳の時都に出、その皇族が二條家であったことから二条吉と呼ばれるようになった様だ。

だがどんな犯罪を犯して流罪になったかは分からない。流罪になったのは41歳の時であったという。

碑銘は一般的にやや大仰に書かれているのが普通だから、それをそのまま信じることはできないと思うが。その碑文には「その性、勇を好み、かつ義を重んじ、善く



二条吉五郎こと倉若吉五郎の墓
戒名 「円翁明樂居士」

天草市有明町楠甫

人と交わる。また智略また拔群で、遊侠の諸士と交わる。子分と称するもの千余人。」とある。つまりいっばしのやくざの親分気取りであつた様だ。したがって皇族としては、風義を乱す好ましくない者であつた。したがって特に犯罪という犯罪を犯していなかったが、幕府の力を借りて流罪に処されたのかもしれない。

それは流罪では本来許されない、妻を流罪地即ち天草に連れてきた事からも推察できる。その妻の名は龍。この龍さん、親分吉五郎を尻に敷くかかあでんかであつたというから面白い。彼女はもともと島原（京の）の遊女であつた様で、その特技の三味線を天草の女たちに教えていたともいう。

吉五郎の墓碑銘を書いている定舜上人も、流人に許されない旅をしているが、吉五郎も妻を同道しての島送り。そのことから流す方もなにか引け目があつたのかもしれない。

では天草での吉五郎は、どんな暮らしやどのような村人と接していたのだろうか。また村人は吉五郎をどのように扱っていたのだろうか。

墓を建てたのは誰か。吉五郎とどんな関係がある者か。墓の碑文を書いた定舜上人と、どういう関係だったのだろうか。京で知り合いだったのか、天草に来てから知り合いになったのか。

ちなみに定舜上人が流されて来たのは天保三年（1832）であり、吉五郎が流されてから5年後のことである。上人は天草流罪時34歳。つまり吉五郎と上人の歳の差は13歳。

ひよつとしたら、吉五郎と上人は面識がなく墓を建てた人が高名な上人に碑銘を頼んだのかもしれない。

ただ腑に落ちないことがある。それは故鶴田文史氏の調査によると、吉五郎は慶応元年（1865）に死去していることになっている。（『西海義民流人衆史』出展九品寺供養帳）

しかし墓碑によると「甲寅冬誌之」となっており、甲寅とは安政元年（1854）である。生前に墓碑を書くこともないではないだろうが、文から見て生前の碑銘とは思えない。

いろいろ疑問が浮かぶが、そこは定かでないので想像する他はない。

ここはちょこっと碑文を元に、想像をめぐらしてみよう。

二條吉五郎 墓碑

円翁明樂居士

居士円樂者東武之産也

姓者倉若氏俗名号吉五郎

曾十九歳而来子華洛奉事 撰録二條殿下数年也

其性好勇且先義而善與人交焉

智略亦拔群也於是遊俠之諸子愛其

正質構義而為兄弟之約或称義児者殆将千餘人也

當時字而呼二条吉其名轟於西東夷可謂希世之英雄乎矣

文政戊子年依巖譴而謫于苓州矣則有其辞世之吟曰

独出関東廿四載 身為俠客心如海

一朝驕勇謫遷刑 誰恨何愁自作皇

ゆめ見ずばさめざらましをなま中に

夢に夢みき夢のさめしを

甲寅冬誌之以応義児某徴

故華頂之禅閣前大僧都定舜

(筆者 現地調査 旧字は新字に改めた)

《墓碑の解説文と大胆な推察》

居士円樂は、東武の産なり。姓は倉若氏、俗名は吉五郎と号する。

東武とは武蔵の国。現在の東京、埼玉、神奈川県東部。

かつて十九歳にして華洛に來り。撰録二條殿下に奉事すること数年なり。

華洛とは京都の事。花の都という意味である。その京に如何なる事由で青年吉五郎が、關東から京都に出てきたのだろうか。それも公家に仕えることとして。一口に武蔵国といってもかなり広い。江戸時代は、幕府領、旗本領、私藩領とたくさんの支配地があった。そのうちの一つ、つまり吉五郎が住む地の支配者が二条家と関りがあり、青年吉五郎に出仕を斡旋したのだろうか。

撰録とは、天皇に代わって政治を統括するという意で、摂政・関白の別称である。尤も當時は天皇は政事的には名ばかりの存在であり、政治には参与できなかつたが、それでも摂政・関白制は残っていたようである。

二條家は、五撰家（近衛家・九条家・二條家・一条家・鷹司家の）の一である。

したがって撰録というからには、二条氏は摂政か

関白であつたことになるが、当時天皇は光格天皇で、摂政はなく関白は鷹司氏であつた。

二條家は、以前かなりの頻度で摂政・関白を勤めた家という事で、俗称的に摂録と呼ばれていたのかもしれない。

ちなみに二條家の当主は、吉五郎が出仕した当時は18歳位であつた様だ。つまり年齢的には吉五郎とほぼ同じという事になる。

また、吉五郎は倉若という姓を名乗っていることからして、さらに公家に仕えることからして、武家の出であつたのだろうか。

「有明町史」には、奉事を中間部屋頭としているが、それは長じてのことであり、出仕時は頭ではなかつたと思われる。但し当時は身分がものという時代。吉五郎が武家でそれ相当の身分の家の子であつたなら、いきなり頭になつてもおかしくはない。

その性、勇を好みかつ義を重んじ、善人と交わる。

智略また拔群なり。

是に於いて、遊侠の諸氏、その正質、義を構えるを愛し、兄弟の約をなす。

或いは、義児（子分）と称する者約千人なり。

当時字して二条吉と呼び、その名西東に轟きし、実に

稀世の英雄といふべき者か。

ここに吉五郎流罪のヒントがあるようだ。

吉五郎、出仕当初はおとなしく仕事に励んでいたが、生まれ持った性質と育った環境から、徐々に京の公家文化に反骨心が芽生え、徐々に拡大していったのではなからうか。関東の気風と京の気風は全く異なる。関東からすると、なよなよした京の気風は、吉五郎に我慢がならなかつたと思われる。したがって京にあるまじき振る舞いに、それに共感する人々が増え、誇張としても兄弟分や子分が千余人も集まり一大勢力を持った。

勿論これらの勢力は、二條家は勿論、公家衆の間でも風儀を乱す勢力で、当然幕府の取締の対象となつた。

関東といえば御存じ侠客の地。数多くのやくざの親分を生んでいる。もともと吉五郎と若干時代は下るが、侠客を生む風土があつた様だ。勘ぐりすぎかも。

す。
文政十一年、嚴鋌（嚴罰）によって荅州（天草）に謫

そのため特に罪を犯したわけではないが、このま

ま吉五郎、及びその勢力を放っておくわけにいかず、司直の手が入った。

京には京都の行政・裁判の他、周辺4ヶ国の裁判・天領の行政及び寺社領の支配のため、東西の町奉行が置かれていた。ちなみに吉五郎配流時の奉行は、東が神尾元孝、西が松平定朝であった。

即ち辞世あり。吟じて曰く。

独り、関東を出ること廿四載。

身は俠客となり、心は海の如し。

一朝、驕雄あつて謫遷の刑。

誰をか恨みを何をか愁う。自ら罪を作りしを。

ゆめ見ずばさめざらましをなま中に

夢に夢みき夢のさめしを

この歌は吉五郎の辞世の句となっているが、筆者は定舜上人の句と考える。というのは、定舜上人の詩によく「夢」が詠まれているからである。

廿四載とは、関東を出たのが24歳の時という解釈だが、24年間と考える。19歳で出仕して24年間務めたという事は、天草配流時は43歳という事になる。

驕雄（おごつて）あつて謫遷（流刑）の刑、とあるように、己自身もちよつとやりすぎたかなと反省

もしている。

是からして吉五郎単なる暴れ者でなく、礼儀をわきまえた、ある意味紳士であつたようだ。

そのため天草での暮らしも、村民と折り合いよく暮らしていたことが想像できる。京にはかつての兄弟分や子分が、吉五郎流刑後も多く残っていたと思われる。彼らから天草での暮らしに困らないだけの仕送りがあつたと思われる。

また子供たちに読み書き算盤を教えたり、村の村政にも学をもつて協力していたかもしれない。村にとって重宝な存在であつたと信じたい。

甲寅の冬これを誌し、以つて義児某の徴に応じる。

甲寅の年は安政元年（1854）。以下の文がよく分からない。義児某とは誰か。あえて大胆に推察すると將軍徳川家斉ではないだろうか。家斉は第十一代將軍で、吉五郎配流時の將軍であつた。前將軍家治に嗣子がいなかった（一子が死去し）ため、一橋家から家治の義児（養子）となり、將軍職を継いだ。徴とは権力者が人を召し出すという意味があるように、これを徴に応じるといふ。

勿論家斉が吉五郎の流刑に直接関わつたわけではないが、微罪にも係わらず権力者の権力の乱用によつ

て配流となった。大いに不満があつたが権力には逆
らえず、逆に堂々と応じてやつた、という皮肉が込
められているように思える。勿論これを記した定舜
上人も同じような立場であり、自らの身を吉五郎に
置き換えて、書いたようにも思える。

邪知すぎるであらうか。

故華頂の禪閣前大僧都定舜

禪閣というのは、太閤の身分で仏門に入った人の
称とある。華頂山知恩院は、浄土宗開祖の法然が開
基した寺であるが、江戸時代は徳川家の庇護を受け
門主は代々皇族が勤めてきた。有明町史には、〃華
頂山知恩院は浄土宗であるから、この場合の「禪閣」
は禅寺を意味せず、仏法修業の殿堂と解釈すべきで
あらう。〃と記されている。

最後に、上中万五郎どんの独特の漢詩読解で、

独出関東廿四載 二十四の時関東を出ましたたい

身為俠客心如海 俠客を気取つとるが心は海のごて広

かつもり

一朝驕勇謫遷刑

ある時ちよいと勇み肌で島流しちゅ
う訳よ

誰恨何愁自作皇

誰ば恨み何ば悲しみも、我がしでか
した事じやもね

《参考資料》

『有明町史』 有明町教育委員会

『西海義民流人衆史』 鶴田文史編著

『続天草歴史こぼれ咄』 上中万五郎著

《辞書等》

『新潮日本語漢字辞典』 新潮社

『日本史辞典』 角川書店

「ウィキペディア」

など

